

屯田兵の開削を礎とした幹線排水路 ＜屯田川幹線排水路（灌漑溝）＞

1. 位置

北海道北見市の中心部を流れる常呂川の支流、無加川の左岸に拓かれた農地を受益とする排水路である（図-1）。

2. 規模

連結ブロック（たれ型式）護岸の排水路で、延長は9.5 km、受益面積は1,355 haであり、その礎となった灌漑溝は、無加川上流の北見市留辺蘂町宮下付近を取水地点として、北見市端野町の北側まで開削され、延長は32 kmであった（図-2）。

3. 経緯

北方警備と北海道開拓を目的とした屯田兵が北見地方へ配置されたのは、明治30年である。その4年後の明治34年に水稻の作付けを目指し、屯田歩兵第4

大隊が総延長32 kmの灌漑溝を開削した。しかし、当時は寒冷地用の種もみの改良が進んでいなかったことや、明治37年に勃発した日露戦争へ多くの屯田兵が出征し労働力が大幅に減少したことなどにより、稲作にまでは行き着かず、馬鈴薯や麦の作付けが限界であった。このため、この長大水路は水田用水路としての役割を発揮することなく自然排水路と化したが、地域の基幹的な排水路としてその効果が十分発揮され、大正時代から昭和の初期にかけての土功組合設立や北見地方の農業振興の大きな礎となった。

北見市街の発展に伴い排水路は上下流に分断されたが、上流側の一部は「屯田川幹線排水路」として地域

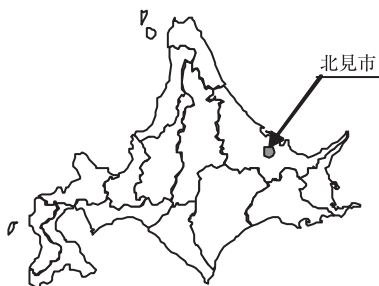


図-1 位置図



写真-1 屯田川幹線排水路

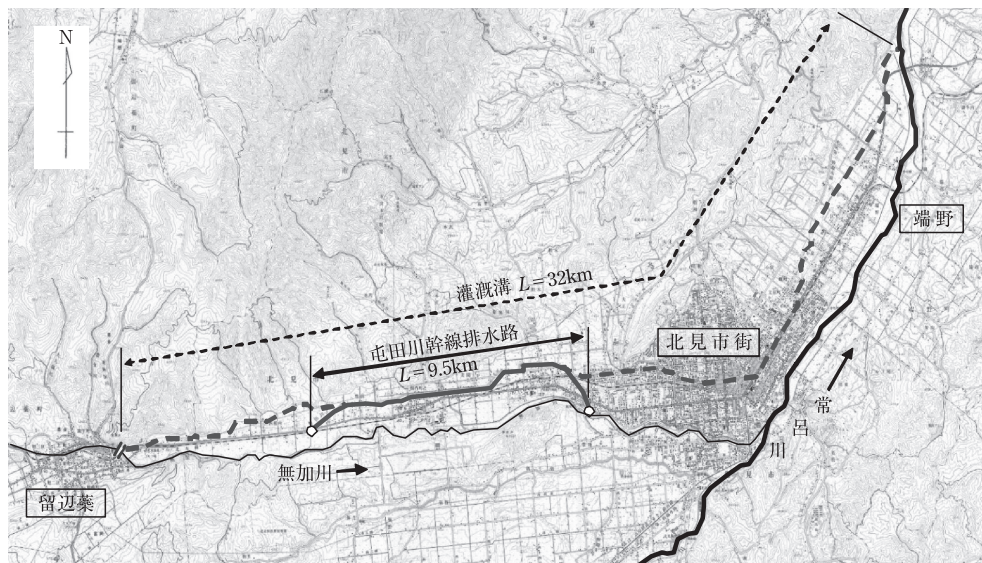


図-2 屯田川幹線排水路（灌漑溝）の経路

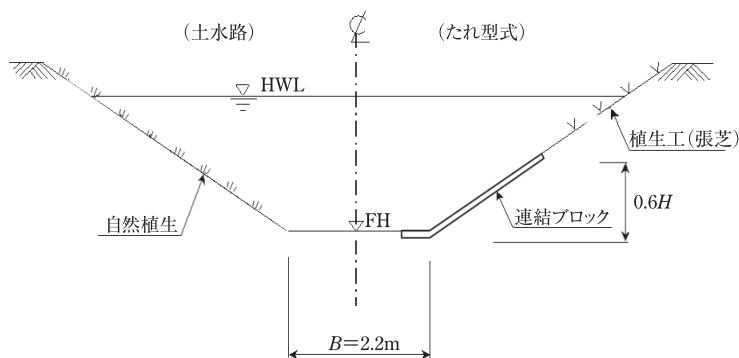


図-3 土水路とたれ型式護岸断面の対比

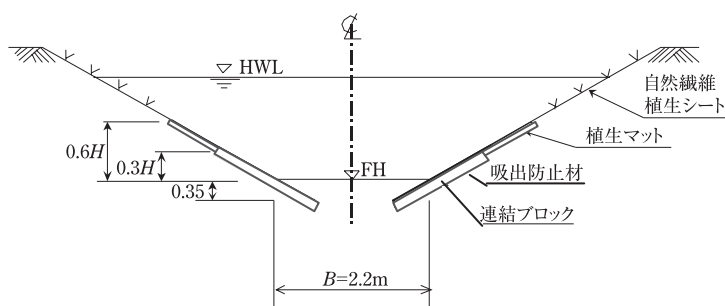


図-4 傾斜式護岸断面

の農業生産を支え続け、昭和 41 年に創設された畑地帯総合土地改良パイロット事業の北見地区において、富里ダムを始めとする畑地灌漑施設と併せて整備された（写真-1）。

平成 21 年度からは、国営造成土地改良施設整備事業により、排水路の一部が改修される予定であり（ $L=5.7$ km）、引き続き、一大畑作地帯として整備された北見地方の基幹的土地改良施設としての役割を担っていくことになる。

4. 技術史

灌漑溝として開削された当初は土水路であったが、畑地帯総合土地改良パイロット事業では「たれ型式」の連結ブロック護岸工法で整備された（図-3）。

今後の改修では、凍上の繰返し作用に起因する連結ブロック背面の土砂流出を防止するため、吸出防止材を敷設することとしている。また、河床中央部の流速エネルギー集中を解消し、安定した流下とするため、法面と同一勾配の連結ブロックを河床深部に延長して設置する「傾斜式」となる（図-4）。これにより土底をねぐら、採餌場、産卵場所とする特性を持つハナカジカ、ドジョウなどの生息環境を保全し、併せて自然繊維植生シートにより法面部を被覆し、周辺の自生植物による緑化回復を図るなどの環境配慮への取組みを

行うことになっている。

5. 特筆すべき技術

当時の開墾は身長を超える高さの雑草刈りや十数回も鋤を打ち込まないと切断できないほどの笹根の掘起し作業、鋸の刃がすぐに使い物にならなくなるような巨木の倒伐など、大変な苦労があった。このような開墾や主食確保のための農作業を最優先したため、灌漑溝の開削工事は厳寒期に行われ、第 1 中隊から第 3 中隊の 600 名全員の出動により、明治 34 年 11 月 28 日から翌年 1 月 24 日までのわずか 2 カ月間で完成させている。

6. 歴史に名を残した人々

三輪光義：二代目の屯田歩兵第 4 大隊長を務めた。当時、屯田兵本部では、厳しい条件下での新開地の開墾に経費労力ともに傾注すべきとの考えから、造田や稲作を禁止していた。しかしながら、民間の移民団による造田が盛んになり、郷里の米作が忘れられずにいた屯田兵の間でも一部で水稻の試作が行われたこともあったことから、英断をもって灌漑溝の開削を命じた。なお、施設の名称に「屯田」が付いているだけではなく、当時の屯田兵村四区付近に「三輪」の町名が付けられている。

（北海道支部 宮崎 晃）